

「引用」とはどのようなように有効な視点か

山田 利博

一

王朝文学で今、争点となつていことは何ですかと問われて、思わず「引用」と答えてしまつたのは、ちょうどその時書いていた論文(注1)が、たまたまそのテーマに関するものであつたためではなく、その術語そのものが非常に今日的なものと判断されるからである。

無論それは、いわゆる平安後期物語を中心に、これまでも使われてこなかつたわけではないし、後に掲げる「引用」の定義にもあるように、引歌や引詩もそれとして数えることが可能であるから、それについての研究が、従来全くなされてこなかつたわけではなく、むしろ初期の源氏物語の古注釈などは、それらを指摘して事足りりとしていた面もあるの、見ようによつては、それが物語研究の王道であつたとも言える。しかし、ほんの少し前までのそれは、ただ単に作品相互の類似点を指摘するに止まり、挙げ句は、平安後期以降の物語でしばしば起きていたように、源氏物語の模倣としてむしろその作品が貶められるなどという事態も出来たりして、作品の方法としての「引用」の意味性の追求など、ほとんどなされてこなかつたと言つても過言ではない。

ところが、これも後掲の定義中にあるように、バルトやクリステヴァの理論が導入されるに及んで、日本に於ける「引用」の概念もがらりと様変わりし、まさにその作品の方法としての「引用」が、近年問題化されているわけだが、ではここで、私見によれば、数ある「引用」の定義でも最善のものと思われる、『國文學』平成7年7月臨時増刊号「キード100 古典文学の術語集」中の、藤原克美氏によるそれを紹介して、本稿の出发点を確認してみよう。

伝統的な国文学研究においても、もとより引用という用語は用いられてきたが、六〇年代から七〇年代にかけて、ロラン・バルト、ジュリア・クリステヴァらによつて編み出された記号学的テキスト理論において、「すべてのテキストは引用のモザイクとして形成される」(クリステヴァ「言葉、対話、小説」六六年／『セメイオチケ』所収)、「テキストとは、文化の無数の中心に由来する引用の織物である (Le texte est un tissu de citations, issues des mille foyers de la culture.)」(バルト「作者の死」六八年／邦訳『物語の構造分析』所収)などと規定されたように、引用はテキストの生成に関わる中核的な概念となり、その影響を受けて近年の国文学研究においても引用の概念は一挙に拡大深化した。すなわち従来準拠・出典・源泉・引歌・話型・パロディといった用語で個別的に考えられてきた事柄が、多元的な引用の相互連関 (Intertextualité / テキスト連関・相互テキスト性なども訳される)として、より包括的統一的に捉えなおされるようになったのである。ただし、記号学的テキスト理論における引用の概念じたいは、何らかの源泉や出典の特定を志向するものではないということに留意しておく必要がある。

(傍線・引用者)

特に末尾、「すなわち」以降に、この「引用」という視点の新たな可能性が感じられ、本稿も、その驥尾に付そうと試みるものであるが、その前に、この定義の唯一の問題点らしきものを指摘しておけば、それは傍線を付した箇所である。この主体が作者だとしたら、同じく『國文學』平成11年4月号の、「源氏物語研究の新しいテーマ集50」で、「引用は

書き手の引用の意図を考証する視座か」という問いに、

未だにそう信じて疑わない石頭がいるのに驚く。引用とは再引用であり、書き手ではなく、読み手の視座だ。私が責任を取れるのは、私という主体がそう読んだ<sup>11</sup>再引用したことにより、以前とは異なる意味を生産した範囲だけである。書き手もそう思っていたか、いなかっただかなどの意図は証明のしようのないことである。「紫式部」という錦の御旗を、自己の読みの権威付けに用いるべきではない。(傍線・引用者)との答えを付けられた東原伸明氏の意見と、真つ向から対立してしまう。勿論藤原氏の傍線部には、実際には主体が明示されていないのだから、そう取らないことも理論上可能ではあるが、その項末尾に、「いずれにしても、引用を論ずるにあたっては、論者は作者の意図的な引用として論じているのか、それとも無意識的な引用として論じているのかといった議論の位相を明確にするよう努めるべきであろう」とあるから、そういうわけでもなさそうである。

それ故「引用」を考える上では、藤原氏の言葉ではないが、それを各自がどう考えるかという問題が先ず存在し、いわばそれが、この件に関する争点の第一なのであるが、それは結局、各人の学問観、或いは責任観といった、大きな問題と関わってくる。と言うのは、傍線を付した東原氏の意見は、実に尤もであり、誰にも反論などできはしないが、稿者が考える学問とは、幻想かもしれないけれども、何らかの形で社会に還元し得るもので、それこそが我々学者が社会に対して取れる唯一の責任のようなものだと思っているので、やはりこれには従えないのである。無論これには異論があっても構わないし、稿者自身も、将来的には考えを変えるかもしれない。しかしそれでも、こうしたことに無自覚に研究を進めるよりはよほど良いのであり、「引用」がその試金石とまでは言わないが、少なくともそれを考えるきっかけとして非常に重要なものだと言えるのである。

したがって本章では「引用」を、読者が理解すると作者が期待しているもの、換言すれば、作者と読者が共犯的關係にあるものとしてそれを論じていくが、抽象的物言いばかりしても、余り理解は得られまい。そこでそろそろ具体例に移りたいが、そうは言っても、藤原氏の定義にもあるとおり、「引用」の概念は多岐にわたっており、全てを一度に論ずるのは不可能である。また、王朝文学という視点から考えれば、先にも述べたように、平安後期以降の作品にそれが多いのは自明であるが、あいにく稿者はその専門家ではない。そこで、やはり一番詳しい源氏物語の、しかも引歌と引詩文に絞って論じた方が良心的というものであろう。いずれはそれを、他の作品にも及ぼしたいと考えていることを一応の免罪符として、本稿の例示を始めた。

## 二

前節末で「引詩文」という耳慣れない言葉を出したが、申し訳ないけれどもこれは造語である。これも前節で紹介したように、今まで「引詩」という術語はあったが、それだと、漢籍の中でも詩しか入らないことになり(現に、『源氏物語事典』「表現・発想事典」で「引詩」の項を担当された新聞一美氏の定義によればそうである)、『史記』を始めとする史書や、仏典等も「引用」する場合を含むには不適當であるし、その術語自体も、今でも用いられているのかどうかはやや疑わしい。と言うのは、その語は確かに『源氏物語事典』には立項されているものの、その語の類書には皆無であり、実質的にはそれと触れ合うものを巻末付録に掲げている小学館の新編日本古典文学全集の源氏物語(以下、新全集

本と略称)も、その標題は「漢籍・史書・仏典引用一覽」であつて、やはりその語を使つていないからである。そんな次第で新たな語を作つてしまつたが、これは対象をやや広げただけで、概念的には「引詩」と余り変わらないから、要は「引歌」の定義さえしつかりしておけば、「引詩文」の定義はそれを応用できるとなるうが、それについては7年7月臨時増刊号の、渡辺久寿氏による、「物語や日記の散文中に、ある特定の古歌や同時代の既成の歌の一部を引用することによつて、文飾をしたり、表現効果を高めて文学的情趣を深めたりする」というのが、最も適当と思われる。

但しこの「文飾をしたり」以下は、勿論正しくはあるけれども、必ずしも明瞭とも言い難く、それを具体的に明かしていくのが、「引用」という視点に於ける今後の課題の一つと思われ、本稿はその一端を源氏物語で示そうとするものであるが、その時、稿者が最も注目するのは「引用」の分布である。と言うのは、周知の如く源氏物語にも、引歌や引詩文は比較的多いのだが、それらは決して平均的に現れるわけではなく、自ずと粗密をなしており、細かいデータについては注1に掲げた拙稿を参照していただきたいけれども、引詩文・引歌、及び参考までに和歌を加えた、割合の高い巻低い巻を調査すると、興味深い結果が得られるからである。例えばそれは早蕨巻で、この巻は、和歌と引歌の一頁当たりの含有率は五十四帖中最も高いのだが、引詩文についてはゼロで、逆に最も低いことになる。この理由は、感覚的にも分かりそうな気はするが、より明瞭になるのは、松風巻の、次の二つの場面を参照した時であると思う。

I 「世の中を棄てはじめしに、かかる他の国に思ひ下りはべりしことも、ただ君の御ためと、思ふやうに明け暮れの御かしづきも心になふやうもやと思ひたまへたしとかど、身のつたなかりける際の思ひ知らるること多かりしかば、さらに都に歸りて、古受領の沈めるたぐひにて、貧しき家の蓬葎どももありさまあらたむることみなきものから、公私にをこがましき名を弘めて、親の御亡き影を辱めむことのみじさになむ、<sup>A</sup>やがて世を棄てつる門出なりけりと人にも知られにしを、その方につけてはよう思ひ放ちてけりと思ひはべるに、君のやうやうおとなびたまひもの思ほし知るべきにそへては、<sup>B</sup>なごかう口惜しき世界にて錦を隠しきこゆらんと、心の闇晴れ間なく嘆きわたりはべりしままに、<sup>C</sup>仏神を頼みきこえて、さりとてかうつたなき身にひかれて山がつの庵にはまじりたまはまじと思ふ心ひとつを頼みはべりしに、思ひよりがたくてうれしきことどもを見たてまつりそめても、なかなか身のほどをとさまかうさまに悲しう嘆きはべりつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世の頼もしさに、かかる渚に月日を過ぐしたまはむもいとかたじけなう、契りことにおぼへたまへば、見たてまつらざらむ心まどひはしづめがたけれど、この身は長く世を棄てし心はべり、君たちは世を照らしたまふべき光しるければ、しばしかかる山がつの心を乱りたまふばかりの御契りこそはありけめ、<sup>b</sup>天に生まるる人の、あやしき三つの途に歸らむ一時に思ひなずらへて、今日長く別れたてまつりぬ。命尽きぬと聞こしめすとも、後のこと思ひいとなむな。<sup>D</sup>避らぬ別れに御心動かしたまふな」と言ひ放つものから、「煙ともならむ夕まで、若君の御事をなむ、六時の勤めにもなほ心きたなくうちませはべりぬべき」

とて、これにぞうちひそみぬる。

(以下、源氏物語の本文引用は新全集本による。②四〇四〜六頁)

II 東の渡殿の下より出づる水の心ばへ繕はせたまふとて、いとなまめかしき桂姿うちとけたまへるを、いとめでたうれしと見たてまつるに、閑伽の具などのあるを見たまふに思し出でて、「尼君はこなたにか。いとしどけなき姿なりけりや」とて、御直衣召し出でて奉る。几帳のもとに寄りたまひて、「罪軽く生ほしたてたまへる人のゆゑは、御行ひのほどあはれにこそ思ひなしきこゆれ。いといたく思ひ澄ましたまへりし御住み処を捨てて、うき世に帰りたまへる心ざし浅からず、またかしこには、いかにとまりて思ひおこせたまふらむと、さまさまになむ」といとなつかしうのたまふ。「棄てはべりし世をいまさらにはち帰り、思ひたまへ乱るるを推しはからせたまひければ、命長さのしるしも思ひたまへ知られぬる」とうち泣きて、「荒磯陰に心苦しう思ひきこえさせはべりし二葉の松も、今はたのもしき御生ひ先と祝ひきこえさするを、浅き根ざしゆゑやいかかとかたがた心尽くされはべる」など聞こゆるけはひよしなからねば、昔物語に、親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに、繕はれたる水の音なひかことがましう聞こゆ。

<sup>H</sup> 住みなれし人はかへりてたゞれども清水は宿のあるじ顔なる

わざとはなくて言ひ消つまま、みやびかによしと聞きたまふ。

<sup>I</sup> 「いさらぬははやくのことも忘れじをもとのあるじや面がはりせる

<sup>J</sup> あはれ」と、うちながめて立ちたまふ姿にほひを世に知らずとのみ思ひきこゆ。

(②四一一〜三頁)

源氏の帰京により、明石巻で生き別れた御方は、その後源氏の一人娘を生んだため、親子共々、京に上れることになる。しかし、源氏の邸にいきなり入るのは、他の夫人方の手前気が引けるので、御方の母尼君の祖父・中務宮が、大堰に邸を持っていたことを利用し、取り敢えず家族でそこに移ることにする。ところが、具体的には後の若菜上巻で明かされるように、娘達の行く末に深く頼むところがある入道は、その目的を果たすため、自らは明石に止まる決意をし、親子は、涙の別れを迎えることになる。それがIの場面で、IIはそこから少し進み、口実を作って大堰を訪れた源氏が、尼君と対面するところである。

古注以来引歌が指摘されている箇所(注2)に傍線、引詩文が考えられる箇所(注3)に二重傍線を付したが、念のため列挙すれば、A II 『古今集』卷第十六哀傷歌八六二、在原しげはる「かりそめのゆきかひちとぞ思ひこし今はかぎりのかどでなりけり」(和歌の引用は全て新編国歌大観による)、B II 『古今集』卷第五秋歌下二九七、つらゆき「見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり」、『後撰集』卷第十恋二の六二三、よみ人しらず「おもへどもあやなしとのみいはるればよるの錦の心ちこそすれ」(注4)、C II 『後撰集』卷第十五雜一・一一〇二、藤原兼輔「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」、D II 『古今集』卷第十七雑歌上九〇〇・九〇一、伊都内親王及び業平「老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君かな」、「世中にさらぬ別のなくもがな千世もとなげく人のこのため」、a II 『史記』「項羽本紀」等の、「富貴不帰故郷、如衣繡夜行」、b II 『正法念処経』卷二十七「觀天品第六之六」、E II 『古

今六帖』第五・二九五―、「みさこいるあらいそなみに袖ぬれてたがためひろいけるかひそも」、F II 『後撰集』卷第十一恋三・七九二、よみ人しらず「千世へむと契りおきてし姫松のねざしそめてしやどはわすれじ」、G II 『紫式部集』六八、「かげ見てもうきわがなみだおちそひてかごとがましきたきのおとかな」、H II 『兼澄集』一二六、「やどあれてむかしのひとはなけれどもすみつつみづのたえぬをぞ見る」、I II 『古今六帖』第五・二六四―、「わがことのいさらをはのましみづのましてぞ思ふ君ひとりをば」、J II 『古今集』卷第十八雑歌下九八四、よみ人しらず、「あれにけりあはれいくよのやどなれやすみけむ人のおとづれもせぬ」である。

見て分かるように、共に六箇所「引用」を含むが、これはこの辺りが、「引用」の「山」とも呼ぶべき部分だからで、松風巻全てが、このような状態にあるわけではない。それについては次段落で触れるが、今ここで注目したいのは、I には引詩文が混じっているけれどもIIでは引歌のみという事実である。これは実は偶然ではなく、引詩文の「山」と引歌の「山」はほぼ重なるのだが、松風巻はやや例外で、このように少しずれを生じている。それ故その箇所を、例として掲げてみたのだが、これは多分、I は父親の情を示すもので、II は父親の情を示すからだと思われる。勿論、そんなにきれいに線が引けるわけでもないのだが、引歌の割合の高い巻は、花散里・帚木・関屋・蓬生等、どちらかと言うと女性の心情が多く語られる巻々であるに對し、引詩文の割合が高い巻は、須磨・幻・匂宮等、男性の心情が多く語られる巻々と考えられる(注5)からであり、先程の早蕨巻の場合も、これと軌を一にするものとして説明できるからである。換言すれば「引用」は、男または女の心情世界を作り上げる時、非常に有効な方法であったと思量されるのである。

また、先程触れた巻毎の粗密も、要件の一つである。紙幅の都合で引用はできないけれども、例えば紅葉賀巻では、巻全体の約三割しかない源典侍のエピソードに、「引用」は約五割も集中する。勿論これは、源氏と典侍との雅なやりとりが多出するからだが、かと言って典侍個人の問題に還元してしまつてはならないだろう。と言うのは、源氏の相手が頭中将に変わつても、相変わらずここではそのようなやりとりが続いているからで、とすればこれは、残りは極めて政治色の強いこの巻に於いて、この場面が果たす意義というものに思いを致すべきであろう。つまり、「引用」を用いることにより、文章に緩急を付けることも自在なわけで、それが巻による多寡にも繋がっていくと思われるのである。

「引用」の効果は今一つ、人物造型に對する寄与も考えられるが、既に鈴木一雄氏の言及もある(注6)ので、紙幅の関係上ここでは割愛する。

以上、「引用」という視点の新しい用い方について三点ほど挙げてみた。今後の手がかりになれば幸いである。

注1 拙稿「源氏物語における「引用」―引歌・引詩文を手がかりに―」(王朝物語研究会編『論叢 源氏物語3―引用と想像力―』 新典社 来春発行予定)。

注2 引歌の認定は、伊井春樹編『CD・ROM 角川古典大観 源氏物語』(平11)による。

注3 引詩文の認定は、今井源衛氏による新全集本の巻末付録に基本的には従い、氏自身も可能性を疑われるものを中心に取捨選択した。

注4 勿論この二首ともaの漢文(但し、小島憲之・新井栄蔵氏校注の、岩波・新日本古

典文学大系『古今和歌集』の当該歌の脚注には、「繡」は「錦」とは異なるから、『漢書』項羽伝の方が出典であると説かれているが、その当否を判断するほどの漢文力は稿者には無いし、もともと本稿では出典を確定するつもりもないので、しばらく通説に従っておく）によることは明らかであるが、テキストの成立を考える時、平安時代人の和歌の力を考慮すれば、漢文と和歌、作者の頭にどちらがあつたかは即断できず、或いは両方という可能性も考えられるので、しばらく併記しておく。いずれの場合であつても論の主旨には抵触しない。

注5 桐壺・幻等は例外的にどちらも多いが、これは長恨歌を基本とするからであろう。

注6 鈴木一雄「源氏物語の文章」(『国文学 解釈と鑑賞』 至文堂 昭44・6)。

——宮崎大学助教授——